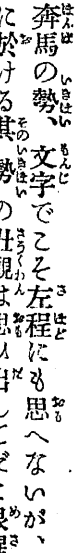

馬には乘つて見ろ

川口孫治郎

奔馬の勢、文字でこそ左程にも思へないが、實地に於ける其勢の壯觀は思ひ出してだに眼醒むる心地がする。うち開けたる牧場の際涯の見えぬ若草の大野原に、吹く春風に綠の鬣を焰の如くに煽らして澎湃たる怒濤の如くに奔馳する放駒は、誠に天馬駿空も左こそと偲ばるゝ。壯絶の光景は迚も里や町での轡が嵌まり面繋がかゝり胸繋と尻繋とが鞍にかゝつて韜でからまつて居る所謂乘馬駄馬耕馬なんかの奔逸せる時の樣子から比較類推の出來るものでない。

この荒駒を制するのが一寸面白い。それも多くの放牧場でやるやうな多人數がゝりでは左程面白くない。何んでも唯一人で綱一筋で即座にやつつけるところに面白味があるのである、殊に彼等の狂奔せる場合に制するのが危險の伴へる丈それ丈面白くて却て容易いのである。

何處の大牧場にも場内の何處かに必ず並樹の通りや壁墻の間に一筋道が出來て居る。奔馬を巧に之に向はしむるが第一の技倆である。既に駈け込まば逸早く他の一端に待伏せて、彼の奔駛し來るを物陰に冷靜に窺つて居るのである。倉皇打つて出では忽ち彼は折返して方向轉換をするが故に此方は飽くまで度胸をすゑて時機を待つのみである容易のことのやうで之は熟練したものでなくては出來難い芝居である。

が眼前僅に十歩といふ間際は砂煙を揚げて驀進して來た其刹那に、俄然として彼の前途に躍り出で仁王立と立塞がり大手を擴げて彼を頭から丸呑にして、マカリ違へば一呼吸に蹴り僵し踏み潰さん決心で、調子は低くとも、山をもゆるがす强みのこもつた一聲ドーとかくれば、如何なる駿馬と雖、此一轉瞬、後へは勿論脇へも移れず、さりとて決して人を犯して前進することを得しないものである。之は彼等の通性である。

此一瞬此方は沈着の中にも極めて敏捷に彼の下顎を片手に下からつまんで拇指と食指で口の兩端を

扣ゆるや否や、用意の麻繩は他の一方の手によつて彼の開ける吻より嵌めらるのである。少くとも口に環を嵌めて面繋をかけ得るのである。之に要する時間は正しく二瞬間である。之より以後は全く此方の手加減一つでどうにもなるのである。

百に一のコヂケタ奴になると尚ほ噛んだり跳ねたりする。否々駿の駿なる奴も大抵は噛むか蹴けるかの癖はある。ドウセ蹄蹶の癖のある奴にはそれ丈の甲斐性も概してある者である。百歩ゆづつて噛まれたとて第一回の噛みは大した傷がつく者でない。而かも片方の手で彼の鼻の穴をグッと突いてやると必ず喰へて居る方を放すに定まつて居る但第一回の喰へのまゝを再び喰へなほしをせられてはドウもフッツリ遣られさうだから此第二回目の同じ處の喰へ直しをしかけた時は隨分用心が大事である。併し元來噛むと蹄るとにきまつて居るものに、やらるゝは此方の落度である。此方にして度胸が据はり用意が到つて居れば彼等は口出しも足出しも出來ないのである。第一口を捉へて急所を押へられては何處で何處を噛み得るか、扨ては塚原卜傳式に遠く離るゝか或は此際のやうに畠山重忠的にひつ擔がんばかりの勢に肉薄して居ればドウして蹄ることが出來るか。殊に肉薄せるもの密接せるものを蹄らないのが彼のやさしい特性であるのである。見たまへ蹄らるゝ男を、必ず恐ろしくないやうで恐しいやうな附いて居るのか離れて居るのか瞬昧至極なコツバイところにグッ〳〵して居ることを發見するであらう。蹄ると噛むとは彼の勝手、蹄らずと噛まずが此方の自由、それにやらるゝとは敏活にして能く坪を押ゆる制馭の能力と餘裕とを有しないからである。馬を呑むどころか馬にのまれて居るからである。少くとも馬と合体する丈の膽勇が欠けて居るからである。

既に彼の頭を自由にし得べきカラミが附かば、如何に暴れても暴れるほど面白い丈の事である。熟練な好事家になると、手綱一本で、丸裸の彼に飛び乘つて、綱の加減と腰のヒネリとで流石の駿馬をも僅か半餉に乘り仆すことが出來る。併しそんな覇振つたことをしなくとも彼の轡を締めて頭部をグット抑ゆれば何の六ケ敷こともない。仰い

で頭を擡げてこそ恐ろしき蠻力もあれ、屈まされては丸きり力の出ないのが彼の特性である。

茲に更に一段の趣味あることは、前にも述べた所謂二瞬間の綱かけ以後に行はるゝ此方の威と恩との並行の靈妙に彼馬君に電光的に以心傳心に閃めき映ずる一條である。詳言すれば彼の暴放を一氣に呑み盡くす膽勇あり自づと閃めく威嚴の一方に、彼を即座に我片身を類化して一体となる丈の同情の藏ふに藏ふべからず何處かに自づとはの見ゆる温容が、彼の過敏な神經に全く直覺的に傳信するやうである。情ある手で一度其平頸を撫づればさしも荒き暴れ駒も掌を反すが如く從順になり始むるのである。再び物に騒いても早や其轡を取れるものゝ温容の前には直ちに鎮靜する。一握りの情けある若草にも彼の態度は著しく改まるのである。茲に感情の交換が行はれ始むれば馬や決して馬でない純然たる人である。

斯かる消息は實際に經驗したものでなくては眞の味が分らない。多くの人々によつて僞りとして笑はるゝ位であるが事實は知る人ぞ知る。吾輩は其詳しき證明の必要を認めない。

彼は非常な甘黨である。吾輩もさうと知つてからは、田舍町の途中で暖かさうなホヤ〳〵饅頭が出來立つて居ると外聞も何もあつたものかは直に之に突貫して湯氣の立つまゝ竹の皮包にして懷中したまゝ歸るのである。暗の夜深けて試に拔足差足門外に着くと、厩の内に早や愛馬の奴耳敏く聽きつけ而かもそれが吾輩であるといふことを能く知つて例の如くフフンと挨拶をするのが洩るゝのである。門を潛つて直に彼の居に至つて前の懷中物を取り出して暗闇ながら掌にのせて差出して居ると、ソツト何かゞ觸れたと思ふと、それは彼が行儀よく吾輩の掌から例のホコ〳〵を頂戴したのである。あの大きな身拵をして吾輩の片手の平にのる丈の饅頭丈でもさも旨かりさうにやつて居る有樣が闇ながら吾輩の心頭に歷々として眼に視る如く浮ぶのである。彼は從來多少扱い難いものとせられて居つたものであつたが、併し吾輩には全く手綱も要らない。詞もいらない。唯我輩の眼付で彼の一擧一動を左右することが出來た。否

吾輩が彼を動かしたのではなくて彼と共に我輩が動いたのであつたのだらう。

春と秋との遠乘からの歸りには、家族の一切が心ばかりは犒ぎらってやつた。秣を支度するもの豆を添ふるもの、飲料を用意するもの、湯を汲むもの運ぶもの、盥に入るもの、扨て洗つてやるもの、それ等の待遇に對して彼は十分に了解をして居る一日の勞苦は何のものかは如何なる辛苦にも喜んで服するすでに銘肝して居つて、いたく滿足して居る有樣が、世話をしてやる此方の人々にもありあり分かるので一入世話燒き甲斐があるといつて家僕も下婢も他事ならず喜んだ位であつた。

彼は又可愛くも中々の音樂趣味をもつて居るものである。世俗に馬耳東風といひ、馬の耳に念佛といふ諺があるが、彼に對しては甚だ失敬な詞である。勿論彼の失驅の際東風を眞正面に耳に受けるほどの必要もなかるべく、強いて念佛を解すべく寺參りの必要もなるべし、又必ずしも唐突にピヤノを聽かされたりオペラを參觀せしめられたりして謹聽も愼觀もしないかも知れぬが、若夫れ夕陽漸く沒して溪流に沿へる里道に人氣稀となりし頃谷より谷にゆれ渡る馬丁ひの無心の追分節の一曲には該一日の積もる辛苦も殘痕なく搔き梢す如くにうち忘れて唯シヤン〳〵と其頸に吊せる鈴の音に拍子を調へ足並揃へて勇んで歸る事實は今尙ほ實地に目擊することである。往年吾輩は日光の山中で一人の馬方の老爺に直接に聽いたところによると、等しき体格の馬で、等しき營養を與へ、別ちなき親切に同等の勞役に服せしめても、馬方の歌の上手と下手とによつて、馬の日日の勞働の疲勞の恢復に差等が出來て其極彼等の壽命に相違を必ず豫則通りに來たすといふことであつた。吾輩も從來は左樣までやさしいものとは思はなかつたが、その後は友人を賴んで時々笛をきかせてやつたこともあつた、彼頗る謹聽して居つた。のみならず其音樂家に面會することを非常に喜んで居つた。

彼は又頗る付の氣兼をする優しいものである。競馬などで勝てなかつた場合には、いたくふさいで、傍から慰藉してやつても只管すまないやうな

樣子をしてスゴ〳〵する、それが又いぢらしくて勝たせてやりたくなる。又勝つた場合の容子といつて傍に居つても可笑ほど機嫌がよい、少し氣分のよくない病人でも此時の彼の容子を見ると覺えず平癒する。それで思ひ出した一條、話の序に簡單に茲に挿んでおかう。

投網鐵砲はそろ〳〵貧乏、

わか（俄の意）を行かうなら駈け馬よ。

之は我輩の故山の片田舎の俚謠であるが、廢藩以後にも競馬が非常に盛んであつた地で、去秋は何處の白が勝つた、此春は何家の青が勝つた、イヤ今度來た彼處の栗毛が素敵だなどと、連山に圍繞せられた方五里許の一桃源鄉裏の駿馬の持主等が互に鎬を削づて競爭をして居つた。競爭心は一家が馬やら馬が一家やら遂に分らなくなつて來る。其隣保までが全く馬と休戚を共にする氣になる。男性のみでない、やさしき女性でさへ非常な熱心なものがあつた。其一例は吾輩の直ぐ隣にあつた。それは大略斯うである。良緣あつて近々談しが纏らうとせる矢先に、空前の大競馬が擧行せらるゝことになつた。緣談と此擧行とは何の關係もないが、此擧行を耳にした其談判中の娘は、一生一度の緣談を棚に上げておいて、豫て興内の時の一代の晴着として新調しつゝあつた一切を擧げて、我家の選手たり我鄉のヒーローたるべく打つて出る愛馬、並に其騎手、轡取り、其他愛馬の擁護者聲援者たる鄉の若黨共に、サラリと分與してしまつた。馬も馬方も鄉の同志の殊に若者共の喜悅と元氣とは張り裂けんばかりであつた。陽氣の發するところ金石亦透る、堂々たる晴れの馬場に、さしもに疾き遠來の選手を物の見事に五身長の差を以て駈け敗つて沸くが如き歡聲裡に、颯爽の意氣四邊を拂うて門に歸つた時、一聲へ斷いた。多少心待に待たれし例の御孃樣が一聲「歸つたか」と洩れた其刹那、朝來踶嚙四邊を戰慄せしめし彼荒馬が生れ變つた如くに兎の如く仔犬の如くに只うなされて幾度かかすけく鼻をならすのみであつた。之は彼が心服——誠に心服を表する唯一の詞であるのである。何處も同し氣の荒き馬方共も若者共も此光景に何れも鳴りを收めて頭が揚らなかつた。

只もう、御蔭で勝ちました御目出度御座いますといふ一點張であつた。殊に其嬢の新郎たらむとして居つた人の親父……即ち前の談判纏れば舅たるべき老人から、衣裳長持はドウでもよい、貰いたいのは持參金でも衣裳でも扨は容貌でもない唯つた一つの其意氣を」とは夢にも口には出ないが、心の中にありやなしや、そは兎に角として、早速、例の媒介者に「先達の話は可成早くまとめたい、好事魔多し、善は急ぐに限る」と何んだか急に居催促に出懸けて來たといふ滑稽めいた實際の事實があつた。右は決して近頃都近くでやつて居るやうな西洋がふれの競馬でない。他人の馬に金を賭けて當つて戎顔になつたりおかめ面をしたり、外づれて閻魔顔になつたり青菜面をしたりする者共とは多少趣を異にして居つた。彼等の熱心は馬の可愛さの薪に燃えて居たのである。我輩は決して彼娘と別に親類でも緣者でもない。唯の他人である。別にヒーキをしたわけでもないのである。眞に馬の愛すべきを解したものは誰も斯くなるは無理ならぬことと思ふのである。

市中で駄馬や乘馬が駄々をこねて動かなかつたり、田圃で耕馬があばれたりして居るのを見る毎に、其罪決して彼等馬に非ずして殆んど盡くは馭者騎手に在ることを熟々我眼に透き徹つて受取るのである。之は獨り馬のみでない。見給へ日本の牛も犬も鷄も其面付が一見喧嘩腰にシカんて居るではない。少しもノンビりしたものがない之は彼等の天性といはんよりも寧ろ其取扱人の邪險なるに多く基因して居るのである。尙我國民の威張るのはよいが、あらぬ方角に威張り散らして彼等動物の性を殘虐するは甚だよろしくない。少し間の拔けた滿人でも四頭の馬ならば巧に使ふが、怜悧な日本人にして二頭の馬も適當に馭ふものが雨夜の星の如しである。馬がわるいか人がいけないのか、大公須かく三省すべきであらう。況んや素直な彼等に益々つけ込んで法外な重荷を負せて曳かせて、追ひ立て引きつれて、聊か阪路に苦しめば無二無三に鞭つとは何たる人間の我儘勝手ぞや。彼等馬君の或者は身に千里の資を有して空しく不遇を内に泣いて居るものもあり、幾

多功勞を積み來りたる老功の士もあらう。近くは朔北の野に砲烟彈雨の間に動らいた殊勳者もあらう。而かも彼等は恩給の代りに、年功加俸の代りに、綠綬褒章の代りに、金鵄勳章の代りに、途上に阪路に鞭撻を頂戴しつゝあるのである。茲に至つて冷血吾輩の如きものでも何ともいへず氣の毒に堪へぬ心地がするのである。

之と同時に端なくも偶び出づるは、駿馬載痴漢走の一句である。之は世に良妻賢母が蕩夫治父をも尙ほ淑然として助けて能く巳の道を全うするもの少からざるを、有道の士が嗟嘆のあまり洩した語であるさうだが、吾輩は人間社會の消息にあまり詳しくない方だから、それが果して然りや否やをあまり承知して居ない、唯動物について殊に馬に就いて、彼等忠貞の駿馬が心なき痴漢の爲に常に虛待せられて居るのを認めて、聊か同情に堪へない感がするのである。

人には添つてみよ、馬には乘つてみよ、勿論人にも賊もあらう馬にも狂ひもあらう。されど其少數の除外例を楯として以て一般を推して、人を見れば賊と思へ馬を見れは敵と思へとするものあらば、その思ふ所こそ賊であり敵であるのである。

古來最も馬に近いたものは武士である。其武士と馬とは果してドンな仲であつたか。瘠衰へし佐野源左右工門でも決して馬を放さなかつたではないか、山内一豊が一生一度の吐息を洩したのは馬を欲しさの爲ではないか。群れ來る追手を斬り拂ひ名に負う墨繪の陣羽織を夕陽に輝かして相加けて眞一文字に湖水をのり渡して阪本城下に着いて、其處に彼の片身の逸物と斷腸の生別を遂げた彼明智の爲に、何人か同情を表しないものぞ。福原落城の砌、敗殘の士卒船を爭つて遁れんとせる際、百戰他年の伴侶を捨つる恐びず此處まで牽ゐ來つて今や船人に充ちて彼を載する能はざるに會ひ、涙を呑んで彼は永訣を宣告して浪際にのこして巳は衆と共に解纜せんとするに當り、消然として此方に向つて三たび嘶かれし時の知盛の胸中を察して、誰か一掬の涙を惜むものぞ。彼等二人の爲に熱涙を棒げて慟哭したものは、敵も味方も、魂は同じ武士仲間であつたではないか。げにや人には

添ふてみよ、馬には乘つてみよ、吾輩は人道の爲にいひ、馬道の爲にいふ。

小兒の食物に就て

長井岩雄

人もし嬰兒の食物は、何が最も良いかと尋ねましたならば、言ふまでもなく、母乳これなり、と答へねばなりません。天地間、有りと有らゆる物の中に置きまして、母乳こそ、極めて適良なる、極めて効驗ある、嬰兒の飲食物であります。他の物は、如何に衛生に適ふとしても、到底母乳に及ぶものではないのであります。抑も婦人妊娠すれば、頓て、その乳房に異常を生じ、月日の重なるに伴れて、漸次、乳房の發達を來し、其月滿ち、嬰兒出生するに至らば、忽ち、その乳汁を分泌して、可憐の嬰兒を養育するに至ります。是實に、自然の惠み深き賜物でありまして、吾々はこの自然より受けたる賜物によりて成育する權利ありといふべきであります。

さて、嬰兒の食物には、如何なる條件を具備してゐるかといふに、第一、滋養分に富んだもの。第二、消化し易きもの。第三、始終變化のなきもの。第四、新鮮なるもの。第五、絶えず、供給の出來るもの。この五つに外ならぬのであります。而も、この五つの目的を完全に具備して居るものは、何であるかといふに、こは、決して、他に求むることは出來ません。即ち母乳を措いて、外にないのであります。されば、毎日、毎週、毎月、その子に適當なる營養分を分泌して、その子の身體を、過不及なく、成育せしむるといふは、實に、造物主の巧妙なる注意によつて、出來たものといはねばなりますまい。

さはいへ、母に慈愛憐愍の心なくんば、どうして、この天の賜物を、絶えず、子に供給することが出來ませう、古より父母の恩は、山よりも高く、海よりも深いといふことは、眞に偶然の言葉でありますまい。然るに、もし、不幸にして、生母病氣に罹りなどして、身體に異狀を生じ、從つて乳に異常を生ずるやうなことがあつた時には、已を得ず